

プレリユード——本とのつきあいは利己的に

本書の基本構成は第1楽章「読む」、第2楽章「打つ」、第3楽章「書く」という3楽章形式になっている。本論に進む前に、全楽章を見わたす前奏曲から始めよう。

1. 読むこと——読書論

アルベルト・マンゲルの読書論（マンゲル 1999, 2008）やアンドレ・ケルテスの写真集（ケルテス 2013）が私たちに示しているように、この上なく私的な営みとしての読書という行為は究極の利己性を帯びている。そこでは本を読むその人だけがこの世に存在し、他者はまったく介入する余地がない。だから、私には私なりの本の読み方があり、それは他者とは何の関わりもない。

しかし、第1楽章で述べるように、多少なりとも一般化できる本の読み方はあるかもしれない。まずはじめに、「本は余さず読み尽くす」ということだ(三中2019a)。本や雑誌(学術誌)を「丸ごと」読み尽くすことには大義がある。しかし、最近では個別の雑誌論文は読んでも、雑誌全体に目配りしている読者はきつと少ないだろう。とりわけ、「電子化」が浸透している自然科学系のジャーナルでは、まとまりとしての「巻」なり「号」の観念自体が希薄になっているかもしれない。論文ごとにくすつぱらく「切り刻んだ」pdfファイルをばらまいているようなものだ。必要な知識断片のみを「拾い読み」ですませてよしとする風潮がすでに広がっている。

その傾向は雑誌のみにとどまらず、本の世界にも浸透している。学術書であっても電子本の章ごとにはらばらに「切り売り」できるような体裁で本造りがなされている事例が増えてきた。それとともに、本を一冊「丸ごと」すなわち序文・目次から脚註・索引まで通して読まないことが多くなってきた。日々余裕のない研究者にとっては雑誌や単行本を「丸ごと読み」するのではなく、必要な論文あるいは章だけを「拾い読み」するのがふつうになってきているようだ。

学術誌の「インパクト・ファクター(IF)」や研究者の「h指数(h-index)」を見れば、ある論文が掲載されている雑誌がどれくらい「引用されたか」を定量化できるだろう。しかし、それらがどれくらい

「読まれたか」は見えてこない。その一方で、最近のジャーナルは、読者が論文を「丸ごと」読まなくてもいいような技法を次々と編み出している。たとえば、論文要旨と図表だけピックアップしたり、こみいった「材料と方法 (materials and methods)」は小さい活字にして論文末尾に追いやったり、研究の詳細は「オンライン付録 (online supplements)」に封印したりする。論文を「丸ごと」読むのではなく、必要部分だけを切り出して「拾い読み」すればいいという風潮は読む側にも読ませる側にも広がっている。それはきわめて効率的な「情報摂取」ではあっても、もはやふつうの意味での「読書」とは呼べないだろう。それとも「読書」ということは自体が現在では死語になりつつあるということだろうか。

私の読書歴を自分なりに振り返ってみると、ある本を最初から最後まで読み切るとか雑誌のバックナンバーを全部読むという「すべて読み」は、私の研究者としての育ち (Bildung) にとっては最良のトレーニングだっと思う。しかも、それができるのはたとえ金銭的余裕はなくても時間的・心理的余裕があったかつての大学院生とそれに続く「オーバードクター」の時代までのことだ。そのゆるやかな時期を逃してしまうともう取り返しがつかないのだが、その後悔は後年になって初めて実感できるのがつらいところだ。

2. 打つこと——書評論

第2楽章で盛大に焚きつけるが、本を読んだら必ず書評を打つように心がけよう(三中 2019a)。読み終えて印象に残った本ならば、私は備忘メモとして長短さまざまな書評文を書き、2005年以來15年も続けている私の書評ブログ(三中信宏 2005(現在))を通じて公開するようにしている。最近書いたいくつかの書評記事について文字数をカウントしてみると、短いのは1500〜2000字くらい、長くなると3000〜4000字ほど書いているようだ。しかし、私がいつも目を通して居る欧米の専門誌——たとえば *Systematic Biology* 誌や *Cladistics* 誌——だと、書評記事は基本的に長く、内容も濃い。なかには刷り上がりで10〜15ページもある長大な書評論文もあるほどだ(Sneath 1982, Farris and Platnick 1989, Brower 2020)。そういう諸外国の書評文化と比べれば日本の書評はまだまだ足元にも及ばない。

一方で、日本の多くの新聞・雑誌の書評欄では、独自の書評文化の伝統なのだろうか、長い書評記事を読む機会がほとんどない。2019年から2020年にかけて私は読売新聞の読書委員として書評欄(「本よみうり堂」)への寄稿をしてきた。読売新聞の場合、長い書評(「大評」)は800字、短い書評(「小評」)は500字くらいの分量になる。この極小フォーマットの制約のなかでどれくらいの書評コン

テンツを詰めこめるかが読書委員の腕の見せどころとなる。実際に新聞書評を手がけてみて初めてわかるおもしろさと難しさがある。

私は自分の書いた本に関しては書評記事や感想コメントを集計して書評の「頻度分布」を構築するように心がけている(214節参照)。多くの実名あるいは匿名の書評者たちがどれくらい私の書いた本を「読解する能力」があるのかが意外にはつきり透けて見える。世の書評者たちは、自分が書いた書評文の集積(＝書評者ごとの「周辺分布」)を通して、逆に評価されているということだ。実名・匿名に関係なくあることないこと書き散らしていればまちがいに「天罰」が下る。ネット社会の書評文化はそうそう「お花畑」ばかりではない。

3. 書くこと——執筆論

数年前、中国地方のある国立大学に統計学の集中講義に行ったおり、番外企画として生物体系学のセミナーを開催する機会をいただいた。セミナー後の質疑時間に、ある参加者から「ミナカさんが本を書かれるときは想定読者層に合わせてどのように書き分けられているんでしょうか？」という質問が寄せられた。セミナーの本筋からは外れていたが、私にとってはとても本質的な問いかけだった。すかさず、質問

者には「ワタクシは自分のためにだけ本を書いているので読者のことを意識したことはまったくありません」と返して、本を書く上での私のモットーについて次のように話した。

私が本を書くときにもっとも重視している点は「自分が読みたい内容の本を自分で書く」ということです。読書人生の経験が増えるにつれて、次はこういう分野のこんな内容の本が読みたいなどという思いが募ることがあります。しかし、とりわけ専門分野が限定される学術書ほど、読み手だけでなく書き手もけっして多くはないので、私が望むような本がタイミングよく出版されるとはまず期待できません。まだ若い頃だったらどこかの誰かがそういう本を書いてくれるまでじっと待つしかなかったのですが、今はそれくらいだったら自分で書いてしまう方が手っ取り早いと考えるようになりました。

自分で読みたい本を書くことの最大の御利益は、第3楽章でもくわしく述べるように、ある分野に関する知識や知見の「体系化」ができることだ。最新の知識の断片であれば専門学術誌の最新号をひもとけばすむだろう。しかし、それらの細切れの知見は何らかの「体系化」をしないことにはばらばらのままで終わってしまう。もちろん、他人による総説や著書を通して、それぞれの分野のすぐれた「体系化」を学ぶことは役に立つ。しかし、もつと「攻め」の姿勢で、自らの観点からの「知識」の積極的な体系化を試みることから得られるものは少なくないにちがいない。

自分で読みたい本を書くことのもうひとつの御利益は「自分で書いた本は信頼できるレファレンスとしてあとで利用できる」という点だ。ある分野の本を一冊書くためにはさまざまな先行研究や文献を参照するのが常である。自分の手になる「体系化」の典拠（原著論文や総説記事あるいは書籍など）はすべて文献リストと脚註そして巻末の索引によって「データベース化」される必要がある。後の章で説明するように、文献と脚註と索引は本の資料的価値を担保するとても重要なパーツなので必ず付けるようにしている。書く本の「かたち」がハードカバーであつても新書であつてもこの方針はゆるがない。

「ひとえに自分のために本を書く」と大きな声で宣言することは、他人から見ればどうしようもなく「利己的」な言い分であるとみなされるかもしれない。そもそも本は他人のためになるように書かれるべきで、「もつと読者のことを考えて本を書け」というような「利他的」な執筆スタイルへのアドバイスは一見もつともらしく聞こえる。しかし、よくよく考えてみれば、想定される潜在読者層はいわば顔のない人々に過ぎない。そのような正体不明の仮想読者たちのことを念頭に置いて本を書くのは、はつきり言つて無理だろう。私にとつて本を書くことはひたすら自分ひとりのための孤独な仕事の積み重ねだ。

では、私が本を書いている最中に読者はいないのかと問われれば、おそらく「そうではない」と答える。実際、私が本の原稿を書き進めているときには、いつも隣にいてそつと耳打ちする「読者」がひとり

いる。その名は「ワルみなか」だ。まっとうな本体である「善良みなか」がせっかく必死になって書いているときに、「ワルみなか」は不意に横から割りこんできてはあれこれ口出しをする。「善良みなか」がせっかく書いた文章にバクダンをしかけたり、よけいな伏線を埋めこんだり、密かな暗号を刻みつけたりするのはすべてこの悪戯好きの「ワルみなか」のしわざである。

長年の付き合いであるこの「ワルみなか」のせいで、私の書く文章はいつもストレートには読み解けない。何となく文意にウラがあるような、あるいは行間を読まねばならないような雰囲気漂う。ひよっとしたら世にいう「悪文」を私は書き続けてきたのかもしれない（拙著の何冊かが大学入試問題の国語科目に出題されることがよくあるのもうなずける）。私が過去に書いた新書（たとえば三中2006a, 2009）を手にした読者からはときどき「新書なのに専門的すぎる」とか「読んでもぜんぜんわからなかった」という批判や苦情をもらうことがある。私の本をまちがって手にしてしまったそういう「被害者」がいることは重々承知してはいるが、私自身はあまり気に留めていない。なぜなら、私はいつも「自分が読む」ために本を書いているからだ。どこかの誰か別の人を「読者」として想定する習慣は毛頭ない。読者と言えるのはいつもここにいる自分の「分身」だけだ。その意味できわめて利己的な書き手と言うしかない。

私のような利己的な書き手は多くないかもしれない。しかし、利己的に書かれた本であったとしても結果として利他的に役立つかもしれないというのは矛盾ではない。私の書いた本を読んで役に立ったあるいは

は得るところがあったと納得してくれる読者がいるのは私にとってまったく予期しないことだ。私は自分自身が書きたい本を書いているのであって、それが他人のためになるとしたら望外の喜びだ。

以上、本に関わる「読む」「打つ」「書く」が私にとってどのような意味で、利己的^レな営みであるかを示した。以下の章ではそれぞれについて順を追ってくわしくお話しすることにしよう。

第

1

・
楽章

「読む」

—— 本読みのアンテナを張る

1-1. 読書という一期一会

「いつまでもそこに本があると思うな」——私が本を読むときの座右の銘はこれだ。いささか切迫感のこもる言い方にはそれなりの理由がある。自らの過去を振り返ったとき、本や論文との出会いの基本は一期一会であり、蒐書の機会を逃してしまうと次はもうないという「飢餓感」のようなものがつねにまわりついている。幸いにして、研究者という生業なりわいを何十年も続けてこられたおかげで、今では身のまわりはあり余るほどの本だらけだ。しかし、いくら頑張つて蒐書したところで、しょせんは儂いものでしかないという諦念が年ごとに強まっている（三中 2014a）。そう、すでに定年を迎えた私はそろそろ年貢の納め時に追い込まれている（実感はまだない）。それとともに長年にわたつて蒐め続けた蔵書の山を予期される災厄（草森 2005；岡崎 2013；西牟田 2015）がくる前にどうしようかと真剣に考えることがある（三中 2017b）。

ひとりの研究者が蒐集してきた書籍・雑誌・論文は、退職引退したりあるいは逝去したあととは、潔く古書業界に流してしまうのが最善の選択肢ではないかと思う。在籍した大学や研究機関が個人蔵書を引き取つて、未来永劫にわたつて保管し続けてくれる可能性は現在ではほとんどゼロだから。今ほもう世知辛くなつてしまった大学や研究機関に寄付したいと申し出たところで、イヤな顔をされるのが関の山だろう。大量の個人蔵書を散逸させずに没後もなお管理されている澁澤龍彦や草森紳一は例外中の例外だ（国

『書刊行会編集部 2006: 草森紳 一回想集を作る会 2010』。それくらいだったら、目利きの古書店に売り払ってしまつて（あるいはネット・オークションに出品して）、それを必要とするどこかの誰かの手に届くようにするのが、けつきよくはその本のためではないだろうか。とくに貴重な専門書ほどニーズはあるはずなので、売り払うのが悪い手だとは思えない。

個人蔵書は各人ごとにパーソナライズ（良い意味でも悪い意味でも）されている。だから、その研究分野が組織的に安定していて後継者にとつても利用価値があるシアワセな場合を除いては、個人蔵書を後に残しても邪魔者扱いされて死蔵の憂き目に遭つたり、廃棄（除籍）される可能性も高い。研究者が残した論文別刷りにいたつては今となつては廃棄するしかない。問題はパーソナライズされた著書や資料だ。古書業界で売れるだけの市場価値はないけれども、資料価値はあるかもしれない（その逆の場合もある）。

公費購入本の場合はずもとどうしようもないので、死蔵なり除籍される運命を甘受するしかない。私費購入本については売り払うのがいい結果をもたらすのではないか。私自身、図書館や大学からの除籍本を古書店で買い求めた経験は少なくない。自分の蔵書が会つたこともないどこかの読者の手にわたるといふのはそんなに不幸なことではない。個人蔵書は「からだの一部」みたいなもので、本人が、いなくなつてしまえば、無理して保全したりしないで、あとは散逸にまかせるのがベストかもしれない。

もちろん、せっかく手間ひまかけて蒐めた蔵書が散逸するのは忍びないという気持ちはわからないでもない。しかし、もし必要であれば思い立った個人が十分な時間とお金をかけて一から蒐書すればいいだけのことだ。私の経験では30〜40年くらいの年月とそれなりの自己資金を投入すれば、自分のライブラリーはほぼ完備すると踏んでいる。しかし、しょせんは私的な蒐書なので、永続させる必要もなければその意義もない。考えようによっては、自分の本を古書業界に流すのは「恩返し」かもしれない。実際、私もどこかの誰かの個人蔵書や図書館除籍本を蒐書したとき、著名な生物学者や哲学者の蔵書だった本を手にすることもあった。そう考えれば、自分が使い終わったらまた古書業界に戻すことで、別の誰かが再利用する道が拓かれるだろう。

職業的な研究者ならば、公的資金（研究交付金や科研費など）をつぎこめばいくらでも蒐書できるのではないかという意見もあるだろう。しかし、私が経験したかぎりでは現実にはそんなに甘くはない。昔もそうだったし、今ではさらに状況が悪化しているが、公費で自由に本が買えるような研究環境は大学でも公的研究機関でももうほとんどないのではないか。

私の場合は例外的に公費購入書籍がもともとほとんどないので、来たるべき（そう遠くない）将来のことを考えないわけにはいかない。遺された個人蔵書をめぐるいろいろな「ごさ」を仄聞するにつけ、「みんなみな後腐れなく売り払ってしまえ」と思う。紙の本ならばそれぞれは長年にわたって永続するかもしれ

れないが、その寄せ集めである個人蔵書は実は短命であってそれに囚われてはいけないという認識が必要かもしれない。一方、電子本はしよせん蒐書の対象に値しない。

1-2. 読む本を探す

一研究者としてキャリアをつくっていく途上では、さまざまな幸運に恵まれることもあれば、予期しない不運に遭遇することもある。良きにつけ悪しきにつけそれらの偶然を正面から受け止めた上で、その先へと生き延びる道を探ることができるとか、どうかは重要だろう。私が学部進学した当時（1978年）の東京大学農学部の身上は、良く言えば「間口」が広く、悪く言えば何をやってもかまわないという無制約の「緩さ」だった。私が入った「農業生物学科」は名前こそわかりやすかったが、それがそのままわかりやすいキャリアにつながるわけではけっしてなかった。学部生時代にはまだ見えなかった内実が大学院に進むとすばいに見えてくる。私が卒論を書いた「生物測定学研究室」は「オーバードクター」の巢窟で、年齢不詳な院生がたくさん棲息していた。そのまま大学院に進学するときも、担当教官から「大学院に進んでもどうにもなりませんよ」と念押しされた。

学部や学科の「名前」だけでは教育や研究の内容はぜんぜん見えない。いま「誰」がそこに所属している、具体的に「何」をやっているのかを知らないことには判断できない。今でこそウェブサイトやSNS

經由で、大学の「中」がある程度は見えるようになったが、私が大学に在籍していたころは分厚い紙の「便覧」以外に進学先の内情を知るすべはなかった。もちろん入進学先の内情（教員と研究テーマ）は事前にわかった方が、平均的には望ましいし、大学の組織体制やカリキュラムはすっきり可視化した方が右も左もわからない学生や院生にとってはありがたいかもしれない。しかし、実際にそこに入ってしまったあとにいったいどんな運命が待ち構えているかは個別的で個人的な「たまたま」が大きく作用する。

進学振り分けをかくぐってお目当ての学部・学科の研究室に首尾よく入れたとしても、指導するはずの教員にちゃんと指導してもらえるかどうかはまったく別問題だ。当時の大学院は「指導しない」という指導がかなりの割合で大手を振っていた（一般論かどうかは定かではない）。私の入った研究室は指導教員が「たまたま」卒論・修論・博論の指導をぜんぜんしないタイプだったので、これ幸いと好き放題させもらった。その「たまたま」がほんとうによかったのかどうか今となってはもうわからない。

1-2-1. 探書アンテナは方々に張る

しかし、その「たまたま」が私にとっていい方向に働いた結果をひとつ挙げるとすれば、それは「読書アンテナ」の張り方を学んだことだった。所属研究室はメンバーによって研究テーマは異なっていたが、理論統計学が「リング・フランカ」だったので、農学・生物学に関する数学や統計学を（勝手に）学ぶ自由度は相対的に高かった。私の場合、学部時代は数理生態学、修士時代は形態測定学、そして博士時代は

生物体系学と研究テーマを誰に相談するでもなく、「自分勝手に」変えていったが、それ自体は何も問題にはならなかった（まわりはみんなそうしていた）。ただし、そのような「独学」を続けることは、もって生まれた「利己主義」を鍛え上げるには適した環境かもしれないが、他方ひとつまちがえば視野狭窄的なひとりよがり陥ってしまうリスクがある。実際、研究上の袋小路にはまりこんでしまつてにっちもさつちもいかなくなるケースは周囲では少なからずあつたようだ。

ある研究分野についてくわしく知ろうとするなら、読書アンテナを一本だけ立てておけば必要な情報はきつと得られるだろう。その読書アンテナはある教科書や特定の学術誌のコンテンツに目を光らせて必要な情報をピックアップしてくれるからだ。たとえば所属研究室が大きなプロジェクトを抱えていて、所属メンバー全員がそのプロジェクトのある「部分」を担当するという研究体制のもとでは、各メンバーの少しずつ異なる読書アンテナを束ねれば該当分野をカバーする情報が遺漏なくそろうだろう。

しかし、事実上「放置」されたも同然の独り勝負をずっと戦い続ける孤独な院生にとつては、うっかり漏れ落としてしまった情報は気づいて拾われることもなくそのままになつてしまう。後半の第3楽章でくわしく論じることになるが、少なくともキャリア形成途上の学生や院生にとつては、ばらばらの断片的な専門情報だけではなく、まとまった体系的な包括知識を得ることが必須だろう。その際、知識体系としての十分な広がりと同時に大きな欠落のない被覆をどのように担保すればいいだろうか。私が留意してきた

のは読書アンテナは一本ではなく複数本を立てるようになるという点だ。もちろん最初からそういうスタイルができあがっていたわけではない。学部生のうちは目の前の専門書や専門論文を読むだけで手いっぱいだった。最低限の基礎となる素養がなければ探索する最初の足場さえつくれない。

探書に出かけられるだけの知的脚力が付いてからが読書アンテナの出番だ。たとえば、ある学術誌に掲載された論文を読むとしよう。たいていの場合、論文の最後には「文献リスト」が付されているので、関心がある読者はそのリストに挙げられている参考文献（論文や著書など）を読むことで、アンテナのある方向に伸ばすことができる。論文の文献リストでは最低限の関連情報しか得られないかもしれないが、リストを手繰ることによりその分野の教科書と位置づけられる基本書に出会えれば、読書アンテナの性能は大きく向上するだろう。うまくいけば、それまでとは異なる方向への別のアンテナを立てるきっかけが得られるかもしれない。アンテナの本数が増えれば、それだけ知識空間の次元が広がるだろう。

1-2-2. シランダム探書 がもたらす幸運

読書アンテナを拡充する際には、方向性を定めないシランダム探書の要素をいつもどこかに忍ばせておくことがとりわけ重要だ。シタまたまシ手に取った本や論文がその後の方向づけに関わる決定的な役割を果たす可能性はいちがいに軽視できない。現在ならインターネットの論文検索機能を使えば、あるテーマやキーワードを手がかりにしてたくさんに関連文献がヒットするだろう。しかし、そういう機械的な